

平成 30 年 1 月 26 日

学位論文審査、最終試験並びに学力の確認結果報告書

大学院心理科学研究科長 殿

主査 中 野 倫 仁



副査 坂 野 雄 二



副査 富 家 直 明



副査 坂 本 真 士



このたび 下 津 咲 絵 にかかわる学位論文審査、最終試験並びに学力の確認を行い下記の結果を得たので報告する。

記

1 学 位 論 文 題 目 抑うつ患者の非機能的スキーマとセルフスティグマに関する心理学的研究

2 論 文 要 旨 別添

3 学位論文審査の要旨

精神疾患に罹患した患者は、スティグマによって社会的に不運な状況に陥ることが指摘されているが、自分自身に対するセルフスティグマが否定的認知と関連することが知られている。介入研究も行われているが未だ臨床的な意義と効果について十分に検討されてきていない。

本論文では、はじめに、セルフスティグマと非機能的認知に関する先行研究を展望し、①尺度の未整備、②セルフスティグマと非機能的認知の関連が明らかでないこと、③介入研究が未確立であることを見出している。そこで本論文では、これらの問題点の一部を解決するために以下の 3 領域の研究を行っている。

研究 1 は Devaluation-Discrimination Scale (DDS) 日本語版の信頼性・妥当性の検討で非臨床群①256 名、非臨床群②371 名、臨床群 61 名のデータから、DDS 日本語版が 1 因子構造であり、信頼性・妥当性が確認され、非臨床群・臨床群ともに併存的妥当性を有することが確認され、有用な尺度であることを明らかにした（一部は精神科治療学で発表済み）。

研究2は非機能的スティグマがセルフスティグマに及ぼす影響に関する研究で、抑うつ症状のある臨床群110名について共分散構造分析を用いて検討し、Dysfunctional Attitude Scale 日本語版(DAS-24-J)で測定した達成動機スキーマがセルフスティグマに影響し、それ自身または抑うつ症状を介して、自尊感情に影響することを見出している。これにより、非機能的スティグマの変容によりセルフスティグマが減少する可能性が示されている（一部はAsian Journal of Psychiatry で発表済み）。

研究3は認知再構成法を用いた介入研究で、抑うつ患者50名に対して各1時間計10回の介入プログラムを実施した。介入の前後で、抑うつ尺度(BDI-II)とDAS-24-Jは各々効果量1.58と1.08と十分な改善を示している。共分散構造分析による仮説モデルの検証では、達成動機スキーマの変化量は、セルフスティグマの変化量を介して、自尊感情の変化に影響することが判明し、セルフスティグマの変化は抑うつ症状には即時的には有意に影響しないという興味深い結果となった（一部はAsian Journal of Psychiatry および精神科治療学で発表済み）。

提出された論文を精査し、口頭発表と質疑応答による面接審査を行った結果、以下のような結論を得た。

(1) セルフスティグマに関する先行研究を適切に展望し、その基本的尺度の日本語版を作成し、その信頼性と妥当性を検証するとともに(研究1)、非機能的スティグマがセルフスティグマに及ぼす影響について検証し(研究2)、介入研究を行いその効果を検証した(研究3)ことは、論文構成や解析法などにおいて、博士論文としての所定の水準に達している。

(2) セルフスティグマという類似研究が乏しいなかで、海外で開発された尺度であって本研究のオリジナルではないものの、臨床的に活用できる余地の大きい評価尺度を作成したことの意義は大きい。

(3) 非機能的スティグマとセルフスティグマの関連性の一部を明らかにし、介入研究を行って、実際の効果を検証したことは、十分に評価される。

(4) 研究発表会と口頭試問において指摘された意見に対しても適切な回答がなされ、予備審査で指摘した個所に対しても加筆修正が行われ、より完成度の高い論文としてまとめられている。

(5) 以上のことから、本論文は十分な科学性と独創性を持つ学術研究の成果であると判断した。

4 最終試験(学力の確認)の要旨

最終試験では、学位論文の内容に関する口頭発表および質疑応答を行うとともに、申請者のこれまでの研究業績を精査し、さらに、外国語を含む専門的知識と技術に関して口述試験を行った。その結果、申請者は研究を遂行する能力が十分にあるとの判断に至った。

以上の結果 下 津 咲 絵 は

博士(臨床心理学)の学位を授与する資格の ある もの

と判定する。